



「ミニデイが始まるまで、まだ時間が早いかな。早く行き過ぎて誰も来てないよね」。そうつぶやきながら、自宅の玄関を行ったり来たりしていた参加者の橋浦みさをさん(右から1番目)。会場に到着したのは、一番最後だった。会場のドアをそっと開けると、そこにはいつもの顔が待っていた。何気ない会話にほほを緩める。「ほっ」とする空間、そんな集いの場が地域に広がる。

With Me 特集 地域包括 ケアシステム

With Us

ともに私たちと、明日へ

**誰もが夢と希望を
持ち続ける地域に**

市は、団塊の世代が75歳になる2025年を見据え、「登米市高齢者福祉計画・第7期介護保険事業計画」策定の準備を進めている。高齢者が住み慣れた地域で、自分らしく安心して暮らせる環境づくりに向けて取り組むためだ。

計画では、①高齢者の生きがい対策の充実②介護予防の推進と安心して生活できる環境づくり③適切なサービスや支援が受けられる基盤整備の3つを基本目標に掲げ、その全てが地域が密接に関わるものとなっている。

2月21日、中田町の小島構造改善センター館内には、笑い声が響いていた。この日は、小島行政区のミニデイサービ

スが開かれ、地域の高齢者が登米市社会福祉協議会職員と一緒に、口腔体操や玄米を布袋に詰めたダンベルなどで、運動を楽しんだ。

企画した佐々木恭平ささき かつひら区長は、職員が話す健康管理法や介護予防について、聞き入っていた。「自分たちが小さい頃は、誰の家に行っても、近所のおじいさん、おばあさんが集まり、楽しそうにお茶を飲んでいた。話をしていた。あのときのような場所を地域に作りたい。楽しい場所であれば、苦手を運動に取り組んだり、健康管理なども考えたりしやすいと思うので。参加してもらえぬメニューを考えるのが、私たちの役割」と、ベンを走らせながら笑顔を見せた。

高齢者が、地域で生き生きと過ごすには、介護保険サービスや公的支援だけでは、本当に必要なものは賄えない。人にはみんな「心」があり、これが通い合ったものでなければ、幸せにはつながらない。佐々木区長がミニデイサービスを企画し、開催しているのは、参加者が満足し、役立つものを提供したい思いがあり、自分事として考えているからだ。

誰もがいずれは高齢者になる。そのときに、住み慣れたこの地で、自分らしく幸せに生活していくためには、これまでのつながりを大事にしなが

ら、お互いが共に自分のこととして心を通わせ、支え合いの輪を広げていく必要がある。子どもたちがみんな夢を持っているように、高齢者も明日の希望を持って生きていく地域。笑顔あふれるこのまちでいつまでも、ともに私たちと。